

公園内で見られる植物

写真は10月7日(土)
自然観察会で見られた
植物などです



オケラ (キク科)

若芽は食用(「山で旨いは、オケラとトトキ」という言葉がある)になるそうです。地下茎は芳香があり健胃剤に用いるほか、正月のお屠蘇にも使われるそうです。私の家でもお酒にお屠蘇の素を入れますが、薬臭くてまずいと思っていました。これで納得できました。また、昔は地下茎をいぶして湿気をはらい、カビ防止にも使ったそうです。



ハギの仲間 (マメ科)

秋の七草の一つ「萩 (ハギ)」は、どこにでも見られる低木または多年草です。地名や特徴から沢山の名前が付けられていますが、蝶の形の花の色は紫紅色が多く、まれに淡い黄白色の部分があったり、淡いピンク色に見えるものもあります。



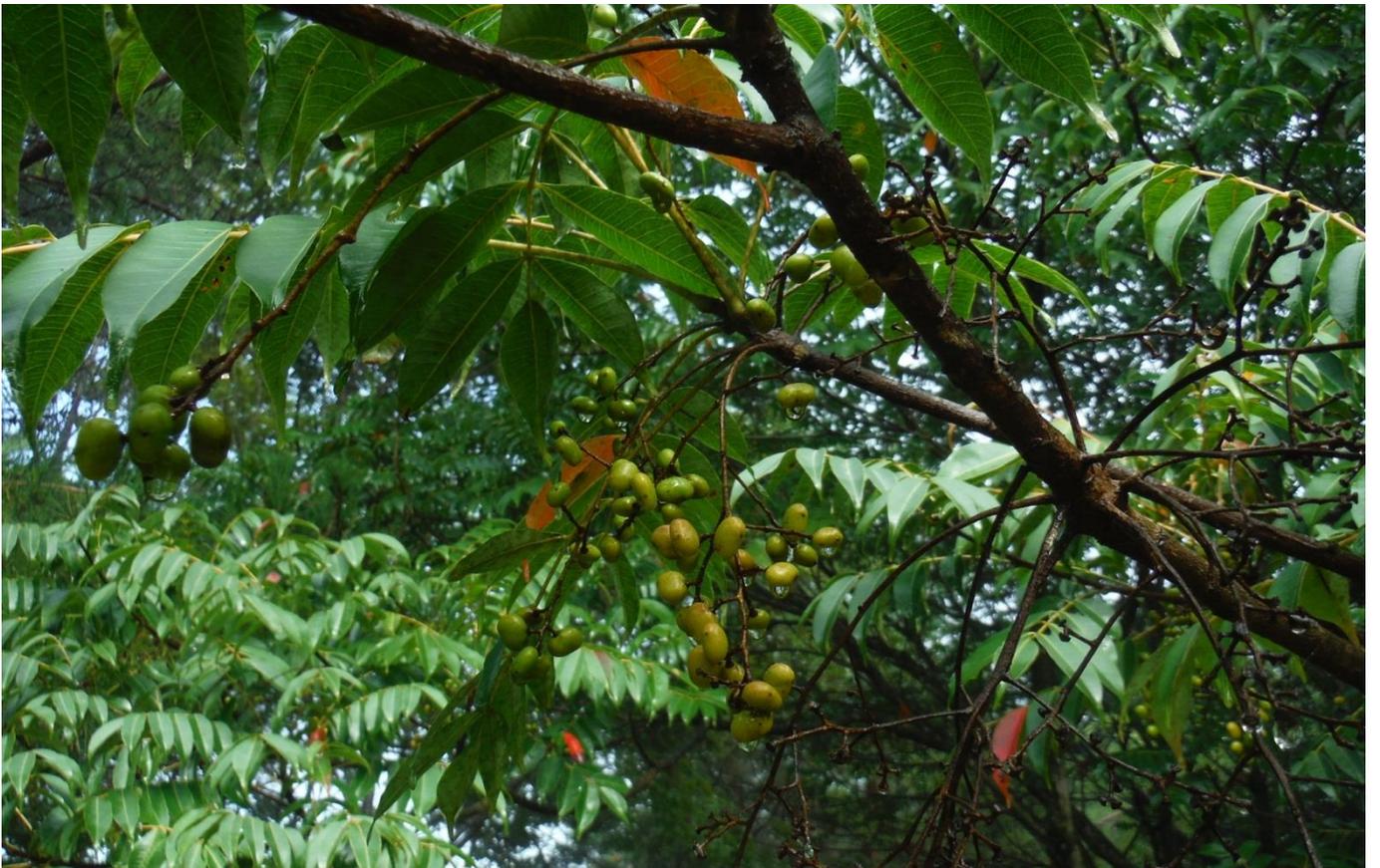
ヌルデのムシコブと実 (ウルシ科)

ヌルデのムシコブは葉軸の翼にアブラムシの一種である「ヌルデシロアブラムシ」が集団で生活しているものです。タンニンが多く含まれていて、お歯黒や白髪染めの色素原料として利用されています。実は、熟すと酸塩味のある白い粉に覆われます。信州ではかつて、これを煮て塩の代用にしたそうですが、塩分は含まれていないので健康食になるかも？試に舐めてみてください。



カラスザンショウ (ミカン科)

サンショウに比べて木も葉も実も大きい事からカラスが付いたとされています。カラスが実を好んで食べることから付いたとされる説もあります。とにかく幹や枝にトゲが多いのが特徴です。



ハゼノキ (ウルシ科)

実の皮は、和ロウソクの木ロウを採るのに、松江藩では特に栽培を奨励した木です。葉はもうすぐ紅葉して美しくなると思われます。



ウバユリ (ユリ科)

花が満開になる頃には葉が枯れてくることが多いので、歯（葉）のない「姥」に例えて名付けられました。でも、見ていると殆どの葉が残っているようです。子供の頃、実が熟すと茶色になり、皮が裂けて中からサラサラと音を立てて種が沢山でるのが面白く、振り回してよく遊びました。リース材料として今は使うことが多くなりました。



イヌホウズキ (ナス科)

別名バカナス。ホオズキやナスに似ているが役に立たないことによります。実は黒く、全草有毒です。鳥の多くは毒があっても実が食べられるから不思議ですが、人間では子供が死んだ事例もあるそうなので、注意が必要です。



アキチョウジ (シソ科)

青紫色の「丁字」の形の花であることからこの名が付いたとされています。アキチョウジは西日本に多く、関東では「関屋の秋丁字」が多いとされていますが私には見分けが付きません。

茎や葉は除虫剤や香料になるそうです。



キツネノマゴ (キツネノマゴ科)

道端に生える小柄なかわいらしい草ですね。マゴ (孫) があるならヒマゴ (曾孫) もあるかなと思い調べてみたら、琉球列島にはキツネノヒマゴがあるそうです。曾孫ですから葉が小さいそうです。名前の由来は花が咲いたあとに伸びるのが狐の尾のようだとか、花の形が狐の顔を思わせるとか？ はっきりしません。紫色の花なのでちょっと目をひきますか？



クサギ (シソ科)

外の赤い袋（がく）が裂けて、中から黒っぽい青紫色の実が顔をのぞかせます。星の中心に黒い点があるように見えます。葉はお茶のほかに茹でれば若葉は山菜として利用できるそうです。果実は草木染に使うと媒染剤無しで絹糸を鮮やかな空色に染める事ができ、赤いがくからは鉄媒染で渋い灰色の染め上がりになるそうです。



クズの種 (マメ科)

日本から緑化の為にアメリカに輸出されたクズは今や「デビルプラント（悪魔の植物）」と呼ばれ、世界でもワースト100に入る外来種の一つに数えられています。種には2種類（3種類とも聞く）あることが分かっています。1種類は大きくて落ちるとすぐ発芽する種、もう1種類は小さくてすぐには発芽せず、10年たってもいい条件だと発芽するという非常に生きの長い種。3種類説は小さくて発芽しない種があるといわれています。しかし、日本では秋の七草の一つとして親しまれ、葛湯、クズ布、薬（葛根湯）、動物（馬や牛、ウサギ等）のエサとよく利用されていました。